【第11回日本言語文化学研究会発表要旨】(1995年12月9日発表)

日本語の二重否定表現について

印　省熙(イン ソンヒ)

1．はじめに

特に複雑に転換する構造をもち、様々な情意を含む二重否定表現は、外国人にとってその表現意図を把握するのはたいへん難しく、日本語におけるコミュニケーションで誤解が生じやすいものでもある。ここでは、そのような二重否定表現の性格について考察するため、現代日本語の二重否定表現の用例を小説、評論、新聞記事、随筆などの文献から６２５件採集した(注1)。その結果、二重否定表現の前にくるものの８割以上は動詞であることが分かったため本稿では、二重否定表現の性格を把握する一つの方法として、二重否定の各表現がどんな動詞をとるかを考察する。その際、日本語の基本動詞を調べた『計算機用日本語基本動詞辞書IPAL(Basic Verbs)』の「解説編」(P10-14)であげている１９５種の動詞を使ってその基本動詞に二重否定の各表現を組合わせて文例を作り、その文例が実際の文脈の中に存在しているか、あるいは存在し得るかについて検討した。文法的に非文か否かの判断ではない。その結果を、

実例としてあるもの(有り得るもの)は、	０か無印
有り得ないものは、	×
特殊な文脈では有り得るものは、	△

と表示し、「０」は自然、「×」は不自然、「△」は不自然ではあるが特殊な場面では可能なものと判断する(注2)。なお、二重否定表現の中で「なしとしない・なきにしもあらず」は名詞につくものであるため、動詞との対応からは外している。

以下その考察の結果をまとめる。

2．二重否定表現と動詞との結合関係

2－1．動詞への制約が強い二重否定表現

１９５種の基本動詞と二重否定表現との対応を見たとき、「×」と「△」の数を合わせた合計が５０以上になるもので、２５%以上の動詞がその二重否定表現と結合すると不自然という結果になったものである。

①「ざるを得ない・ざるべからず・ずにはいられない・ないではいられない・ずにはおかない・ないつもりはない」：これらはほとんど同じ動詞に対して「×」や「△」の印がついたもので、前につく動詞に対して許容度が低い、つまり動詞に

対してある制限を加えている。これらは動作の主体が人間である場合が多く有意志動詞を要求している共通点をもっている。そのため、状態を表す動詞や自然現象を表す動詞、その他動作を表す動詞の中でも自動詞で無意志動詞であるものにはほとんどつかない。

②「ないことでは(も)ない・ないほどではない」：動詞の７０％以上のものに対して「×」や「△」のマークがついたもので、前にくる内容が「こと」や「ほど」に置き換えられるものでなければならないという制約をもっている。そのため「(彼に)背かないことではない」は成立せず、「(妻子が)いないほどではない」も不自然である。これらは「少しは～する(ある)」という少ないけれどその可能性があるためはっきり断定しない表現である。従って「(兄に)あたる・負ける・そびえている」などの「少し～する(ある)」などと言えない動詞にはつかない。このような傾向は「ないものではない・ないではない・ないわけではない・なくはない」に共通している。

２－２．動詞への制約が弱い二重否定表現

「なくてはいけない・ないといけない・なければいけない・なくて(は)ならない・なければならない・ねばならない・ないと分からない・ないとは言えない・ないとは(も)限らない・ないはずが(は)ない・ないわけがない・ないＮは(が)ない・なくては仕様がない・なくなることはない・ないことは(も)ない・ないわけでは(も)ない・ない(の)かも知れない・ないに違いない・ないものはない」：基本動詞と二重否定との対応を見たとき、「×」と「△」の数を合わせた合計が１０にならず、５％の動詞にのみ不自然という結果が出たもので、動詞に対する制約はほとんどないといっていい。

①主語または動作主として必ずしも人間がくることを要求せず、モノ・コトがくることもできる。

②特にこの中で「×」や「△」が最も少ない「なくてはいけない・ないといけない・なければいけない・なくて(は)ならない・なければならない・ねばならない・ないはずが(は)ない・ないわけがない」は、基本的に＜動詞＋「ない」＞になりにくい「負ける・すぎる・去る」などの動詞にのみつかない。その他の動詞とは共起する。

２－３．基本動詞意味分類との関係

基本動詞を意味分類項目から分けて二重否定表現との対応を検討すると、状態性の動詞の存在・所有、関係認定、単純状態を表すもの(３６．６％)、動作性の動詞の中で、時間を表すもの(２２．２％)、出現・発生、消滅を表す

もの(１６．９%)、自然現象を表すもの(２０．６%)において「△」や「×」の数が最も多かった。

なお１９５種の動詞を有意志動詞(「着る・行く」など)と無意志動詞(「晴れる・枯れる」など)に分けた時、有意志動詞の１２７件中の１０件(０．７%)、無意志動詞の７９件中の５７件(７２．１%)が、二重否定表現３６項目に対して「△」と「×」を合わせた数字が５件以上になるものである。この現象から有意志動詞よりは無意志動詞のほうが二重否定表現と共起しにくいことが分かる。その反面、動作を表す動詞の中で、移動の出発・帰着を表す動詞や、知覚・思考・発見・経済活動・社会活動・言語活動など人間の動作や活動を表すものでは「△」や「×」になるものが最も少なく(それぞれ５．６%、５．４%)、特に着脱を表す動詞の場合はほとんどの二重否定表現と共起する。

２－４．二重否定表現と動詞の結合分布

二重否定表現の３６項目に結合したときに「×」や「△」つまり不自然となった動詞の数の分布を示すと次のとおりである。

①２０項目以上のもの：二重否定表現と最も共起しにくいもの
「負ける・余る・そびえている・すぎる・去る」

②１０項目を超えるもの：やや共起しにくいもの
イ。状態の動詞：「備わっている・優る・劣る・違う・あたる・堪える・変わっている」
ロ。動作の動詞：「（自転車が溝に）はまる・（目が）霞む・逃す・経つ・（歓声が）あがる・現れる・寂れる・積もる」

③３項目以下のもの：ほとんどの二重否定表現と共起するもの。人間の意志的な動作を表す動詞がほとんど。「比べる・決める・急ぐ」など多数

３．まとめ

以上、二重否定表現と基本動詞との結合関係を分析し、その結果として表れた二重否定表現と動詞との関係について考察した。その結果、二重否定表現と無意志動詞は共起しにくい反面、動作を表す有意志動詞は二重否定表現と共起することや、「負ける・すぎる・しくじる」などのそれ自身否定の意味合いをもつ動詞には二重否定表現がつきにくいことなどが分かった。

このような二重否定表現と動詞との共起関係において表れる特徴は、二重否定表現がもつモーダルな性格と関わりがあるのではないかと考えられる。その点についての詳しい検討は今後の研究課題としたい。

＜注＞

(注1)二重否定表現採集の条件としては陶(1991)にならって、

一、一つの述語表現に限られること、

二、否定を表す表現が二つあるべきこと、

三、二つの否定は連続的で、後ろの否定が前の否定を制約すること、とした。

(注2)動詞に二重否定表現を対応した時のその成立いかんについては、採集した実際の用例を参考にするものの、用例でなかったものに対しては内省によらざるを得なかった。その作業において論者は日本語を母語としないため日本人3人に基本動詞と二重否定表現の対比実験作業においてのインフォーマントになってもらい、その使用いかんについて検証した。

＜参考文献＞

鮎澤孝子(1990B)「新聞と否定表現」「日本語学」12明治書院

泉井久之助(1956)「否定表現の原理－一つの意味論的分析－」『言語の研究』有信堂文庫

太田朗(1980)『否定の意味』大修館書店

情報処理振興事業協会技術センター(1987)『計算機用日本語基本動詞辞書IPAL』

陶振孝(1991)「日本語の二重否定について」「日本語学」6

松村明編(1987)『日本文法大辞典』明治書院

(お茶の水女子大学　人間文化研究科　比較文化学専攻1年)